
 総 説

滝沢哲学の読解の座標と私の米文学

佐 川 愛 子*

Understanding American Literature through Takizawa's Philosophy

Aiko SAGAWA*

Abstract

It all started with my encounter with Takizawa. Takizawa Katsumi's mentors were Nishida Kitaro and Karl Barth, and they both had great influence on him. While he was a true successor to Nishida as a thinker, Takizawa radically criticized the fundamentals of Nishida's philosophy. Similarly, though he sympathized with and profoundly understood Karl Barth's Barthian Theology and the New Testament Bibliology, he was severely critical of both. Takizawa's philosophy is therefore a new kind of metaphysics, or, an entirely new, truly profound way of thinking about God, human beings, freedom, the world, being—in fact, a new perspective on all aspects of human life.

The crux of Takizawa philosophy is the primary aspect, or the conditions, of human existence, "Immanuel (God with us)." "Immanuel (God with us)" is the primordial, fundamental condition of human existence. It is the foundation from which every human comes into existence. It is our one and only true home, our life's certain and unquestionable basis, where we are allowed, or urged, to enjoy its unconditional support and blessings, and love each other as we are loved by God. In whatever state our consciousness is, or our society is, nothing in our daily lives occurs independently of this foundation, the primordial relation that dominates the universe.

"Immanuel (God who supports us is always with every one of us)" cautions us of the vanity in perceiving individual achievements and thinking, however "right" or "noble" they might seem, as what supports us and gives our lives meaning. For those are, in reality, but fleeting treasures that may satisfy us temporarily but cannot serve as the pillar of life that supports each of us completely. In this God-given world, God's crucial dictate to us is: "Love your neighbor as yourself" (Luke 10: 27).

It is from the abovementioned Takizawa's philosophy that I gained insight into the past and current phenomena in the world, and from which I have drawn my own frame of references that shape my views of literary works. Thus, I owe this paper, which presents my reading and interpretation of James Baldwin, Alice Walker, and Edwidge Danticat, to Takizawa's philosophy.

Keywords: Takizawa's philosophy, "Immanuel (God with us)," James Baldwin, Alice Walker, Edwidge Danticat

1. はじめに：滝沢哲学との出会い

私が滝沢克己の本を最初に手に取ったのは『ドストエフスキーと現代』で、1981年4月のことだった。「ドストエフスキー」の名に惹かれてこの本を開けた時、本論が始まる前の「序」の最初の部分からいきなり衝撃を受けた。連合赤軍派が起こした山岳ベース事件に対するマスコミの反応に対して、「しかし、私たちがその潮に乗って、かれら『連合赤軍派』を自分から差別するとき、私たちはそのように差別する自分自身を、どういうものと考えているのだろうか。自分自身の何であり、どこにい

るかを、ほんとうにありのままに見きわめているだろうか。ひょっとして、かれらを非難・嘲笑する私たち自身のなかに、ドイツ人の《Schadenfreude》^(注1)と呼ぶあの快感、どこか薄暗い自己満足が忍び込んではいないであろうか。そうして、この自己満足、怪しく甘いこの快感に身を委せるとき、かれらを——もともと『優しく素直な子供』であり、『よく出来るまじめな生徒』であり、『頼もしく愉快的な友達』でさえあった若者たちを——あの凄惨な地獄にまで追いつ込んだ無気味な何かは、すでに音もなく、私たちの生命の奥深く、その作業を開始しているのではないであろうか」と鋭く問いかけていた。こ

* 英語・英米文学研究室，女子栄養大学：Laboratory of English and American Literature, Kagawa Nutrition University

のわずか3ページの「序」の中だけでも、「人間存在の根元に横たわる或る大切な一事を無視して……」「私たちが、人間のではない・ただそれのみが本当に確かな・愛の熱さと冷たさを知らないとき……すべては、人間存在に本来自然な生気を失って狂い始める」「事実存在する人間にとって、真に頼むべく畏るべきものは何か。それはどのように私たち各自、すべての生死にかかわっているか。あなた自身、私自身のいま居る此処はそもそもどこか」「自己自身・人間自身の事でありながら、人間のあらゆる思いからまったく独立な存在の事実のロゴスを能うかぎり精確に聴きわけ、平明に言い表す真正の科学の道が……人の生命の奥底にまで届くことなしには、私たち生身身の人間の生活と政治が、魔術的・イデオロギー的・昂奮から根本的に解き放たれて、真に個体的・全人類的な美しい形をなすことは、とうていこれを望むべくもない」と、それまで読んできた全ての本とまったく違う処から発せられている、まったく次元の違う、魂を激しく揺り動かす語りかけに、これこそが求め続けてきた本物の哲学だ、という感覚があり、鳥肌が立った。その後は、憑かれたように、手に入る限りの滝沢克己の著書を手に入れ、次々に読んだ。

上に「それまで読んできた全ての本とはまったく違う処から発せられている」と述べたが、実は、それより前にこれと似た感覚を持った本があった。それは、1980年10月始めに深い感動と大きな驚きをもって読んだ『比佐子その生と死』だった。この本との出会いも新鮮で衝撃的だった。比佐子さんのあの瑞々しい感性、俗的なものに目を眩まされるということがまるでなく、清も濁も、モノをあるがままに観て取る眼。その清々しさ、透徹した目、明晰な頭脳に、私は心底驚き、読み終えた瞬間には比佐子さんは私のロールモデルとなっていた。それにしても、この人はどうしてこんなに自由な感性を持ってこんな風に生きられるのだろうか？と思った私の疑問は、滝沢克己が彼女の父親だと分かった時に、解けた。No wonder! (それもそのはず、当然だ!) と。比佐子さんの全く新しい、心底私を驚かせた、私も絶対に獲得したいと願った視点と思考の座標は、「滝沢」と同根のものだった。^(注2)

2. 私の米文学研究における滝沢的視点

(1) James Baldwin

私が黒人文学を勉強することになったきっかけは、学部から大学院に進む前のジェームズ・ボールドウィン(1924-87)との出会いであった。大学院博士前期・後期課程を通して私の研究対象はジェームズ・ボールドウィンだった。アメリカという白人至上主義の国で、黒人でもホモセクシュアルであるという二重の重荷を背負って生きた人だ。彼の主題は三つ：神(教会)とアイデンティティと愛だ。少年の頃に、アメリカで黒人として生きることの恐怖から逃れるために教会に入り(教会は当時多くの黒人の避難所だった)、少年説教師まで勤

めたが、結局、教会の中には愛が完全に欠如していることに失望し(*The Fire*, p.40)、教会を拒絶した。多くの批評家がボールドウィンはキリスト教を拒絶したと言ったが、私は、彼は世俗化し腐敗した教会を拒絶したのであって^(注3)、神を拒絶したのではない、むしろ神を求めている、と考えた。彼のアイデンティティの探求には、私自身十代の時分からなぜか強烈に「本当の自分になりたい!」と念じ続けていたこともあり、強く共感した。『次は火だ(*The Fire Next Time*)』(1963)という珠玉のエッセイの中に次のような箇所がある。

「苦悩できない人間は絶対に成長できないし、自分が何者であるかも知れないのだ。自分の人間性を、自分のアイデンティティを、それを破壊しようと燃えさかる人間の残虐性という炎の中から毎日掴みとらなければならない人間は、もしその努力の末に生きながらえるならば、またたとえ生きながらえないとしても、地上のいかなる学校でも、また事実いかなる教会でも教えられないような、自分自身と人間生活についてのある認識を得るのである。彼は彼自身の権威を獲得するのであり、それは揺るがすことのできないものである。これは、自分の生命を救うために、彼が外見を見破り、何事も当然と思わず、言葉の背後に隠された意味を理解しなければならないからである。」(*The Fire*, 84 訳文著者)

小説『もう一つの国(*Another Country*)』(1962)には、地獄絵図のような混沌としたアメリカが描かれていて、評価は二分されているのだが、私は、この「もう一つの国」というのは、個人が白人・黒人、異性愛・同性愛といった本質的には人間の価値判断の基準とはなりえない物差しで測られるのではなく、あくまで一個人としての真に正当な評価を受けられる国、個人が外部の恣意的な基準によって人間性を蝕まれない自由を享受し、確かなアイデンティティを持ち、他者との愛の関係の中で生きてゆくことのできる国であると捉えた。そして、愛^(注4)の欠乏という癌に冒されたアメリカ社会に日常的に生きながら、なおもこの精神の理想郷に到達しようとボールドウィンが考えているのは、(アメリカ的無垢(イノセンス))を捨てて、魂の根元的な純粋さである無垢——神によって造られた人間が「エデンの園」で持っていた原初の無垢——を取り戻す能力のある人々ではないか、と考え、そのような主旨の論文を書いた。

この後ぐらいに滝沢哲学との出会いがあった。私が「本当の自分になりたい」と願っていたことと、ボールドウィンのアイデンティティ探求の解明に、確かな視座が与えられたような感覚があった。私には無論、ボールドウィンにも、滝沢哲学の指し示す原点は意識になかったし見えてはいなかったとしても、渴くように求めているものは、同じ方向を向いているように思われた。『もう一つの国』の後、ボールドウィンに関して数編の論文を書いたが、それらの作品解釈は滝沢思想に助けられた。

(2) Alice Walker

博士後期課程を出て、アリス・ウォーカー（1944-）に取り組むようになっていた頃は、私の生活と人生の指針が滝沢哲学の指し示してくれたものであったように、読解の座標もはっきりと、私に理解しえた限りでの、滝沢哲学のものだった。ウォーカーを研究対象にしたのは、私の中に醸成されてきていた滝沢哲学的人間観・世界観に非常に近いものをその作品世界にみたからだ。

私のウォーカー論で出版されたものを、以下に2点掲げる。

「アリス・ウォーカー ― セクシズムのくび木を外すために」という論文^(注5)ではウォーカーの最初の三作を取り上げ、彼女が、民主主義国家アメリカにおいて搾取され抑圧され続けた黒人社会の内部でさらに、白人に抑圧された黒人男性が黒人女性を抑圧しているという差別の二重構造の実態を描きつつ、作品を追うごとに黒人女性が自らを人種差別と性差別のくび木から解放してゆく道筋を描き出しているのを、滝沢哲学の視点に助けられながら跡付け、解釈した。

第一作目『グレンジ・コーブランドの第三の人生 (The Third Life of Grange Copeland)』(1970)では、主人公で黒人物納小作人のグレンジの妻マーガレットは、黒人でしかも女で妻であるという、社会から押しつけられた定義と価値観をそのまま受け入れ、潰される。二人の息子ブラウンフィールドの妻メムは、高等教育を受け小学校の教師となった女性だ。ブラウンフィールドにとっては優劣を測る絶対の尺度である黒い皮膚についても「肌の色は、大地が野の花にしてあげているのと同じこと」と一切の付加価値をつけない。しかし、彼女も、アメリカの白人社会が押しつける価値基準を内在化し、妻の自立と教養を許せない無学な夫の暴力に結局は殺されてしまう。

二作目『メリディアン (Meridian)』(1976)の主人公メリディアンは、高校生で妊娠したため退学して結婚し、夫は高校教育を受け続けているのに、一気に母と妻の役割を担わされてしまうが、公民権運動との出会いを機に、押しつけられた生活ではない自分の人生を生きるために戦い、自立していく。

三作目『カラーパープル (Color Purple)』^(注6)(1982)の主人公シリーは、冒頭では、父親にくり返しレイプされ、二度までも妊娠させられ、二度とも産み落とすとすぐに赤ん坊を取り上げられた14歳の少女だ。妻の死後若い娘と再婚した父親から、4人の子持ちの男やもめ「ミスター」と有無を言わず結婚させられる。黒人の女として、白人社会からはもちろん、黒人の男社会からも、まったく人権を有する人間とは見做されていない。これ以下のところはないだろうとさえ思えるところからの出発だ。しかしそれでも、誇り高き女ソフィアや自由奔放なブルース歌手シュグの愛に助けられて、押しつけられた価値観の呪縛から徐々に解放され、偏在する神の愛

のなかで真に自由に自立して生きることができるようになる。「フォークパンツ・アンリミテッド」^(注7)という会社を設立し、そこで彼女が製造販売するフォークパンツがシリーの自立の象徴なのだが、私は論文を以下のようにしめくくった。

「では、シリーの自立・自律の印であるようなフォークパンツは、何を象徴しているのでしょうか？ 筆者の考えでは、それは、すべての人が例外なく、生まれながらに与えられているはずの権利を象徴している。人が、自然のまま、ありのままの自分である権利、たとえどんなに強力なものであっても、全能の神ならぬ人間が定めた価値観や基準によって測られ、評価され、縛られない権利、である。どんな人にもフィットして、これをはいていれば誰でも心地よいというシリーの作るフォークパンツは、人間の命の源である万物の創造主たる神から、私たち一人ひとりに個別に与えられた、それぞれ唯一無二でユニークな命そのもの、そこではあらゆる人の命の重さが絶対に同じである、人の存在の原点、そこに立って初めて、互いの違いをそれとして正しく認め、評価することが可能となる、人間絶対平等の原事実そのものを表わしているように思われる。そしてそれは、誰でも、求めさえすれば、いつでも、手に入れることができるものであり、それを身にまといさえすれば、あらゆる不自然な囚われから解放されて自由となり、真に自分らしく生きることができるようである。ちょうどシリーのフォークパンツを買い求めた人々が、それによって心地よい生活を手に入れたように。

ただ、残念なことに、現実の人はだれもみな、物心両面の持ちものに囚われ、ひたすらこれを追い求めて生きているために、それへの執着から解放されて初めて見えてくる、この、本当は単純な事実、すべての人間の存在の原点が、見えないのである。『カラーパープル』のハッピーエンディングはあまりに楽観的で現実離れしている、という批評が多いのも、読者の側の、また批評家の側の、あまりに世俗の価値観にまみれた思い込みと、この人間のほんとうの自然への盲目が原因かと思われる。『彼らの目は神を見ていた』というのは、ウォーカーが『私にとってこれ以上大切な作品はない』と言い切った、ハーストンの作品であるが、ハーストンの魂を受け継いだウォーカーの目も、人の目には見えない『神』を、確かに見ている。」(pp.57-8)

『『悦びの秘密を手にして』 ― 女性性器切除の因習に挑む』という論文^(注8)では、アフリカの架空の国オリンカの伝統として受け継がれ、行われている「女子割礼」(女性の性器切除FGM)を題材に、民族の「伝統」という名で女性にふるわれる暴力を告発している作品『悦びの秘密を手にして (Possessing the Secret of Joy)』(1992)を扱った。女性性器切除 (Female Genital Mutilation) は、アフリカや中近東の国々で九千万から一億人の少女や女性におこなわれている。ウォーカーが女性の性器切除の風習を最初に知ってから25年後に満を持して書いた作品

で、FGMをテーマとした世界で最初の小説であり、FGMが実際に行われている国々の当事者らから抗議の声があった。ウォーカーは「私はこの小説を、教育を受けたアフリカ系アメリカ人としての私の良心への義務として書いた。実際、このような小説を、タシ（小説の主人公）のような女性について、性器切除のような主題について書くために、私は教育を受けてきたのだ」と言っている。

滝沢は、一人の人の立ち方の歪みは「かれ自身と周囲の生に避けがたく、果てしない軋轢と亀裂を引き起こしてゆく」（『ドストエフスキーと現代』25）と言う。そうだとすれば、一人の人が正しく立てば、その良き波動も止め難く周囲に広がっていく。『カラーパープル』ではウォーカーは「性的虐待を受けながら、自分の言葉でそれについて語ることを一切禁じられてきた何千人もの子供たち（そして大人たち）の人生の恐怖の状態」を事実として明るみに出し、萎縮したシリイの人生の全面開花を可能にしてみせた。ここでは、タシに語らせることで、これまで隠されてきた性的虐待のもう一つの事実を明らかにして、タシ（と彼女の背後にいる何千万人もの女や娘や少女たち）の解放の道を探っている。そして、そのことを論じる私は、できる限り滝沢哲学のそれに近い視座に立っていたいとの願いを、冒頭に次のように言い表した。

「人はだれも、自分で選んだのではない時と場所に、ただ一回きりの生命を与えられ、そこで生きるように定められている。私たちが実存の人としてこの地上に生きるということは、私たちに与えられたこの条件のなかで、常に何かを考え、何かを選んでいくということ、そのようにしてその都度特定の姿をとり、特定の生命の響きを奏で、刻一刻自分史を描いていくということである。それは、あくまで私たち個人の自由な選択・決断であるが、他のものや人との関わりなしには一時も生きていけない人間のことであり、否応無しに私たちが関わる他の人々の生の基調に波動を伝え、彼らの生を微妙に左右していかざるをえない。そして、あたかも小さな風が起こした小さな波が遠く広く輪を広げていくように、いつかこの地上に共に生きる人間全体の幸不幸に関わる普遍的なこととならざるをえないだろう。

人の生が本質的にそういうものである以上、人がその生の基盤と目的をどこに置いているか、何を支えとし何を目標に生きるかは、一人その人の人生の禍福を左右するのみならず他の人々の運命に関わることであり、不断にその正邪を問われるものである。またそれは、そういうものとして、常にわれわれの真剣な関心事とならねばならない。さらにそれが一民族、一国家のこととなっても事情はまったく同様であるが、一民族、あるいは国家の姿勢がどうであるかは、すでに歴史が証明しているように、あまりにしばしば多くの人々の運命を暴力的に決定するものであり、その重大性は測り知れない。」（pp.170-1）

具体的なストーリーの紹介は省くが、性と愛の本当の

悦びを奪われた女たちの「悦びの秘密」は、不当な抑圧に対する「抵抗」である。タシが命をかけて立てた抵抗の小波は、彼女の夢を乗せて、あちこちに広がっていくだろうことを予感させて物語は終わる。しかし、現実には、女が変わるだけでは、父権制社会の性差別構造は変わらない。歴史上常に権力の座にあり、性差別社会を作ってきた男たちに、希望は持てるか？ が問題になるが、私は、ウォーカーはピエールという青年人類学者において、一つの答えを提出している、と考えた。以下、論文の結論部分から引用する。

「ピエールは、ウォーカーの抱く一つの理想の男性像であり人間像であると言えるだろう。われわれ人間は、生まれてくる時も場所も自ら選ぶことはできない。また、ある人がどの人種に属し、どちらの性を有するかも、われわれ人間のまったく関与しないところで決定され、選択の余地なく与えられる属性である。したがってそれらは、本来決して、ある人の人としての価値を測る尺度とはなりえない。ウォーカーは、ピエールにおいて、人種や性を自らの足枷にも武器にもせず、人の人としての評価に本来いささかも関わるることのできないそのような外的特質を楯に自分が他人より優位に立つ必要を感じないで、ただの人として立つことのできる一人の人を創造した。アダム（アフリカ人女性の恋人タシが性器切除を受けたのを知りながら、彼女と結婚したアメリカ人男性）は、既成の価値観を内在化させていたため、タシを愛してはいても彼女の苦しみに徹底的に寄り添うことができなかった。しかし、ピエールの目は、ウォーカーとともに、既成の価値観に縛られず、真に人の価値を定め、人を生かすものは何かを、真直ぐに見ているように思える。そのピエールは、きっと、ウォーカーとともに、『わたしの歴史』（herstory）^{（注9）}を掘り起こし、そこから現代を照射しながら、タシの『抵抗』の精神を受け継いでいく女たちの歩みに寄り添っていくであろう。

ウォーカーは、初期の作品以来、一貫して人種差別の中の性差別に焦点を当ててきた。アメリカ黒人が白人社会から受ける抑圧と、その耐え難い抑圧の故に屈折し、鬱積した黒人男性の屈辱感と痛みと怒りのすべてが、黒人女性への肉体的・精神的暴力にそのはけ口を見出している構図を明らかにし、そのような差別の二重構造の中で虐げられてきた黒人女性の存続と解放を探求してきた。この最近作（『悦びの秘密を手にして』）では、抑圧者が『アメリカ白人、及び彼らに抑圧されたアメリカ黒人男性』から『アフリカの白人植民地主義者、及び彼らに抑圧されたアフリカ黒人男性』へと移り、被抑圧者がアメリカ黒人女性からアフリカ黒人女性へと移っている。しかし、社会的弱者が、更に弱い者をいじめることで強者体験を得て自尊心をごまかそうとする人間心理の構図は、全く同じである。そして、どの社会においても、最終的な痛みを引き受ける役目は、女や子供に押しつけられている。その事実が変わらない限り、ウーマニストウォーカーの闘いも終わらない。彼女は常に、『な

ぜ子供が泣いているのか?』を問い続けるだろう。

私たちは、社会の差別構造を明らかにし、これを変革しなければならない。が、そのスタート地点は常に一人ひとりの人間である。個人個人が変わっていけば、一つひとつの変化は小さな、個人的なものであっても、その波は、いつか大きなうねりとなり、社会全体を変えるだろう。誰も、この地球上の誰かの苦しみに無縁ではありえない。一人の人間の抵抗の精神が、呼応する魂に出会い、未来へ希望をつなぐエネルギーとなるのである、というのが、ここでもまた、ウォーカーの主要なメッセージのように思える。」(pp.181-2)

(3) Edwidge Danticat

私が現在最も力を入れているのは、ハイチ系アメリカ黒人作家エドウィージ・ダンティカである。作品上の出会いは2001年8月、当時奈良女子大学教授であられた風呂本惇子先生が文部科学省の科学研究費を得て始められた「カリブ文化・文学研究集会」に参加させていただいた時だった。最初に*Breath, Eyes, Memory* (『息吹、まなざし、記憶』) を読んでから急速にダンティカの世界に惹き込まれていき、2003年12月のこの研究会の終了時に成果を本の形にまとめることになった時に、私は真先にダンティカを担当させてほしいと申し出て、最も惹かれていた作品*The Farming of Bones* (『骨狩りの時』) について論文を書いた。「記憶・証言・癒し——『骨狩りの時』における癒しのメカニズム」と題したこの論文は、『カリブの風——英語文学とその周辺——』(鷹書房弓プレス 2004) に収められている。

ダンティカとの個人的な出会いは、彼女の作品に出会ってから2年後の2003年8月に訪れた。彼女の来日中、その*After the Dance* という作品を翻訳出版していた現代企画室とハイチ大使館との共催で「エドウィージ・ダンティカを囲んでハイチ文化を楽しむ夕べ」という催しがあり、私が通訳を務めた。この時私は『骨狩りの時』の論文を執筆中で、その後しばらくして書き上げた論文を、せっかく個人的に知り合いになれた彼女に読んでほしくて、英訳して送った。すると彼女は、「素晴らしい。とても感動しました。注意深く読んでくださって感謝します。あなたの知的解釈 (intellectual observation) をとても楽しみました」というメールをくれた。作家本人にそう言ってもらえ、私は無論素直に心から嬉しかったが、彼女が感動してくれた作品の読み・解釈は、滝沢哲学から学んだ「読解の座標」がなければ、恐らくあり得なかった。

『骨狩りの時』は1937年にドミニカ共和国で起きたハイチ人移民労働者大虐殺の史実を題材にしたフィクションである。ダンティカの世界はウォーカーの世界と重なる。「持てる者」と「持たざる者」、「権力と富を握る者」と「差別され、虐げられる者」。ここでは、主人公アマベルというハイチ人女性のかげがえのない恋人は搾取され続けた挙げ句に殺され、主人公も身体と心に癒されない

傷を負って、苛酷な運命を生きてゆく。一方で加害者側の富裕層ドミニカ人たちは、富と安楽な生活を享受している。その表面上の幸運と不運が、視点をドラスティックに変えれば、実は全く逆転されていること、本当の癒しが、一体どこから誰に与えられてくるのかを、そしてそれを作家は確かにしっかりと見つめて物語っていることを、私の論文では論じた。そこに共感してくれたからこそ、ダンティカは「感動」してくれたのだろう。

(4) ダンティカ作品の翻訳

ダンティカと出逢い、その作品を読むうちに私のなかで膨らんできた思いは、研究業績を挙げるために研究書に作品論を書くよりも、素晴らしい彼女の作品そのものを日本の読者に読んでほしいということであった。そしてその願いの叶った第一作目の翻訳出版以来、彼女の作品をその魅力を損なわない日本語へと翻訳し、その時々思いを込めた解説「訳者あとがき」を書くことで日本の読者にダンティカとハイチの魅力を伝えることが、私の生き甲斐のひとつとなっている。

(4)-1 『愛するものたちへ、別れのとき』(*Brother, I'm Dying*)

2007年にダンティカはノンフィクション*Brother, I'm Dying* を出版した。ダンティカの父親は彼女が2歳の時に、家族を養うためにハイチからニューヨークへ渡った。彼女が4歳の時には母親も夫の後を追って移住し、彼女はハイチで12歳まで父の長兄の伯父さん夫婦に育てられた。この本はダンティカが生涯深く愛したこの二人の「父」の生と死を「二人の娘」としての深い愛と理解をもって、丁寧に綴っている。母国での生活に見切りをつけ、活路を求めて海を渡り、アメリカに帰化することで家族を守り抜いた父と、ハイチに留まることを選択し、牧師として地域の貧しい人々を助け続けた伯父の人生と、それぞれの悲惨で悲痛な最期は、世界初の黒人共和国という輝かしい歴史を持つが故のハイチという小さな国の悲運と、その早すぎる奴隷たちの国の独立を赦せなかった大国アメリカの覇権主義との関係の歴史に密接に繋がっていることを、ダンティカは、彼女に特有の静謐でしかし強靱な筆致で証言してゆく。

私は、2007年11月に初めてこの本を読んだ時から、できればこれを翻訳して、日本の人びとにダンティカという作家を、ハイチという国を、アメリカという大国の動向がいかに小国の国民の生活を左右しているかを、知ってほしいと思い続けた。そして、やっと2009年12月末の出版にこぎつけた(正式には2010年1月の出版)。そこへ1月12日朝のハイチ大地震が起こった。首都ポルトープランス近郊は壊滅、死者31万人以上を含む被災者は約370万人にのぼった。驚愕した。

ハイチという国のことなどほとんど知らなかった日本の人々の目が、一時的とはいえ、一気にハイチに集まり、カリブ海に浮かぶ小国で(野球好きの人なら知って

いる) ドミニカ共和国の隣りの国で、「西半球の最貧国」だということなどを、ニュースを聞いたり読んだりしている人なら一応知るようになった。そして、日本に3つあり、私もダンティカ作品との出会い以来関わっているハイチ支援団体を中心に支援の輪が広がった。

この大地震発生によるハイチという国への注目とともに、『愛するものたちへ、別れのとき』という邦題をつけたこの本も注目を浴び、さまざまな書評が出た。少しでも多くの人に読んでもらいたかった翻訳者としては、複雑な思いがあった。それでも、日本語翻訳版の出版と同時に発生したこの大地震が注目を集める一つのきっかけになったのかもしれないが、主要な新聞・雑誌に著名な識者らによる多くの好意的な書評が書かれたのは、やはり、作品そのものの力の故であることは間違いない。

(4)-2『骨狩りのとき』(*The Farming of Bones*)

先に(3)の項で述べたように、この作品は1937年にドミニカ共和国の独裁者トルヒーヨが「ハイチ人問題の最終的解決」と称してドミニカ共和国を白人化する目標を掲げ、国境付近に住むハイチ系住民(その多くは貧しさゆえにドミニカに出稼ぎに来て、苛酷な条件の低賃金でサトウキビ農場労働者として働くハイチ人だった)を虐殺した事件を題材にした小説で、文学の形を借りた1つの証言の試みだといえる。一日で三万人以上を虐殺したと言われ、両国の国境をなしていた川は「虐殺の川」と呼ばれている。ダンティカは、この小説で主人公アマベルの物語を語ってゆくなかで、不当に低く軽い価値を与えられて、歴史の闇に葬られてきた人びとの封じられた口を開き、虐げられ抹殺された人びとにも、それぞれにかけがえのない命があり、それぞれが語るべき物語を持っていたことを示す。そして、それらの物語を想像的に再生することで、この歴史的悲劇を生み出した社会のからくりを、ということつまり、その時その場に生きていた人びとの心のからくりを、眼に見える形にしてゆく。

アマベルのご主人様ドン・イグナシオや、その娘で、召使いのアマベルを遊び友達として育ったヴァレンシアは、将軍を崇拜し自らも支配者となる野望を抱いてハイチ人虐殺を指揮した(ヴァレンシアの夫の)ピコとは違い、ハイチ人に憐れみの情と善意をもって接しているように見えるし自らもそう思っている。しかし彼らでさえ、目の前にいるハイチ人たちの生活の現実にあきまぐろ盲目であるのは、彼らの価値観に深く根付いた人種差別・民族差別主義の故である。人間を人種(肌の色)で等級付けして一向にあやまらず、しかも常に自らを上位置づけようというその心性が、彼らを、たとえ無自覚のままにでも、抑圧者の側に留めるのだ。彼らは、たとえ表面上はさまざまな持ちものに恵まれ、優雅な生活をしていても、そのような心性を持ち、そのような生き方しかできないということ、すでに罰を受けてしまっていると言えるのではないだろうか。私たちは、彼らの目

に見える幸福の後ろに、彼らの大きな不幸を見ないだろうか。彼らが、持ちものに拠らない真に深い人と人との結びつきと、そこから得られる幸福から、いかに遠いところにいるかは、ピコとヴァレンシアの最後まで冷え冷えとした結婚生活を見ただけでも明らかである。彼らの生活における愛の不在は、他者の痛みへの鈍感と無関係ではない。

この物語を読んで確信するのは、権力と富を握る者に幸せが恵まれているのではないということ。人の幸不幸を測るものさしは、必ずしも目に見える運不運にあるのではないということである。物語の終りで、アマベルは「そこに眠る死者たちが自らの涙を川の流れに混ぜるといわれている」虐殺の川に入り、身を横たえる。この場面の彼女が「産湯をつかう新生児のように」と新生のイメージで描かれているのは、深い悲しみを知る人へのみ恵まれる〈癒されて新しく生きてゆく喜び〉があるということなのだろう。

(4)-3『地震以前の私たち、地震後の私たち それぞれの記憶よ、語れ』(*Create Dangerously*)

ダンティカが「危険を冒して創作せよ」と題したこの作品は、ハイチのディアスポラ(海外移民)でありアメリカに住んで執筆する移民作家として、自らの立ち位置を確認し、創作することの意味と意義を問い続ける彼女の思索を集めたものである。

彼女は言う。「危険を冒して創作する、危険を冒して読む人びとのために。これが、作家であることの意味だと私が常々思ってきたことだ。自分の言葉がたとえどんなに取るに足らないものに思えても、いつか、どこかで、だれかが命をかけて読んでくれるかもしれないと頭のどこかで信じて、書くこと。私の祖国と私の歴史——私は人生の最初の12年をパパ・ドックとその息子ジャン＝クロードの独裁の下で生きた——から、私はこれを、すべての作家たちを一つに結びつける行動原理だとずっと考えてきた。……もし今でなくとも何年も先の、これからまだ夢見なければならぬであろう未来に、どこかでだれかが命の危険を冒して私たちの作品を読むかもしれない。たとえ今でなくとも、何年も先の将来に、私たちはどこかでまただれかの命を救うかもしれない。なぜなら、彼らが私たちに、私たちを彼らの文化の名誉市民とするパスポートを与えてくれているから。……私たち[ハイチ人]は今でもまだ彼ら[古代エジプト人]と同様に、危険を冒して創作しようと努めている。まるで、一つひとつの芸術作品は命の、魂の、未来の身代わりであるかのように、古代ギリシャの彫刻家がそう感じたかもしれないように、そして、マルセル・ヌマとルイ・ドロアン^(注10)が確かに信じたに違いないように、私たちにそれ以外の選択肢はない。」⁽²²⁻³⁶⁾

原題は「危険を冒して創作せよ」であるが、2010年1月12日の大地震を経て2011年に出版されたこの作品では、「私たちのゲルニカ」と題された第12章に、「これか

ら先はずっと、地震以前のハイチと地震以後のハイチがあるのだ。そして、地震後のこれからは、私たちの読み方も書き方も、ハイチ国内でも国外でも、もう決して以前と同じではないだろう」という言葉があり、私がこれを翻訳した2013年には、私たちもすでに2011年3月11日の東日本大震災という未曾有の大震災に見舞われ、しかもそのあまりに大きな傷痕を、今もまだそうであるが、その時もまだ癒しきれずにいたので、邦題はこのようにした。

どの国の人びとについて語る場合もその国の人びとが生きてきた歴史、とりわけその人びとの記憶に留められている歴史の理解が不可欠だが、ダンティカは言う。「これは私の確信だが、記憶と格闘するというのは、ハイチ人が囚われている多くの複雑なことのひとつだ。勝利を記憶し、失敗は言い繕ってごまかしてしまえばよいというのが、国民全体の総意のように思える。だから、私たちはハイチ革命についてまるで昨日のこのように話しながら、人民をその革命に駆り立てた奴隷制についてはめったに口にしない。私たちの絵画は、輝かしいエデンの園のようなアフリカのジャングルを描くけれども、「中間航路」^(注11)を描くことはない。私たちは、救世主と独裁者の間を、そして自国の抑圧と外国の暴虐の間を、まるでジェットコースターに乗せられているように滑り続けてきた。その挫折と幻滅の長い歴史から、私たち全員が共有している粉々に打ち砕かれた精神を守るために、私たちは、社会全体が歴史を通しての記憶喪失症を涵養し、毎度同じような恐ろしい事態が近づいているのに気づかず、結局はその悲慘を再び生きるというサイクルを、際限なく繰り返している。」(93-4) (ハイチの歴史は[注](12)を参照されたい)

13歳でマルセル・ヌマトルイ・ドロアン^(注12)の公開処刑を見て、その後国内の潜在的反対勢力を牽制すべく町のあちこちに貼り出された二人の遺体の拡大写真を見て、「ハイチの歴史を記録できるように、写真家になりたい」とフォトジャーナリストになったダニエル・モレルについての章「アケイロポイエートス（人の手で作られたものに非ず）」で、ダンティカは、フランスの哲学者ロラン・バルトを引用する：「写真は、復活と関係がある。われわれは写真に関して、聖ペロニカの布に染み込んだキリストの顔についてビザンティンの人びとが言ったのと同じことを言えないだろうか？ それは、人の手によって作られたのではない。アケイロポイエートスだ、と」。そして言う、「私たちは、すべての情熱を込めた努力について、同じことを言えないだろうか？ 恐れずに創造すること。恐れずに創作すること。恐れずに見て、見つめて、聴いて、読む人びとのために。恐れずに書くこと。……これがおそらく、作家であることの意味でもあるのだろう。何ものも自分を止めることはできないし、決して自らやめることもないであろうかのように書くことが。全身全霊で、あるいは無謀にも、アケイロポイエートスを信じているかのように書くことが」。

(4)-4『海の光のクレア』(Claire of the Sea Light)

作品の舞台はヴィル・ローズという貧しい海辺の町である。「人口およそ11,000人、そのうちの5%が裕福であるか、快適な生活水準を維持していて、残りの人びとはおしなべて貧しく、赤貧の人たちもいた」と書かれている。主人公のクレアは7歳。母親はクレアを出産した時に死んでしまい、途方にくれた貧しい漁師の父親ノジスは、生まれて二日目にクレアを妻の姉に預けた。そして、3歳の誕生日に引き取ったのだが、クレアが7歳になった今、娘に自分と暮らしていたのでは絶対に得られないよい人生を与えるために、資産家で織物屋を営む婦人ガエルにクレアを養女にしてもらおうと働きかけている。

作品は少女クレアの7歳の誕生日の朝に始まり、その夜に終わるのだが、その一日の間に、私たちは、この小さな町に住む幾人かの人、とりわけ生き難さを抱えている人びとの人生のオプザバーとなり、この人たちがさまざまな要因に、殊にハイチ特有の社会的状況に、翻弄されている、やりきれない不条理に、思いを致すことになる。

作品の出版は2013年8月であるが、私は、その前の5月に、作品社の好意でゲラ刷りで読み、読み終えてすぐにダンティカにメールを出した。

「私は今それを読み終えたところで、まだ深い感動に気持ちを静めることができていません。最後のページを読むときは泣いてしまいました。あまりにも深く心を動かされているので、その私の気持ちを伝える適切な言葉が（私の語彙不足のために）みつかりません。

実は私にはこの本を読み始める前から予感があったのですが、果たしてそのとおりに、この物語は私の心の最奥部にまで届き、深い感動を与えてくれました。この本を読む大多数の読者が同じ思いを経験するでしょう。私は、この本を読んで次のようなことを知ることができ、嬉しく思っています。悲慘と悲運はどこまでも私たちにつきまとうかもしれない、そして、私たちの必死の努力にもかかわらず、私たちの苦しみは現実と和らぐことは少しもないかもしれない。でも、自分を勘定に入れない無私の愛と本当のコンパッション*は、最後には私たちを救うだろう、ということ。これは、私たちがどこに住んでいるかにかかわらず、万人に共通の真理だと思います。この本が私たちに教えてくれるのは、本当の幸せはどこにあるかということです……」*com=共に、passion=苦しむ、痛みを分かち合う

そして返信をもらった。「私の方にもあなたにお礼を言うのに適切な言葉が見つかりません。思いやりのある言葉をありがとう。とてもとても深く感動しました。感動的な言葉をくださってほんとうにありがとう」と。

「訳者あとがき」で私は書いた。「それでも、この物語は、絶望で終わってはいない。『戻らなければ』と一心に思いながら山を駆け下りるクレアにわかったこと。同性愛を断罪する社会の鞭に打ち据えられるのを逃れたい

一心で犯してしまった過ちの重さに、命を手放そうとしている若者に、自らも『もう少しで悲しみの海に溺れて死ぬところだった』父とマダム・ガエルが交替で『息を吹き込んで生き返らせているところ』に戻らなければ、と懸命に走るクレアにわかったこと。それが、『海の光のクレア』（＝暗い海を航行する船を導く灯台か？）に託したダンティカのメッセージではないか」と。

(4)-5『ほどける』(UNTWINE)

この物語の主人公たちはこれまでの作品の主人公たちとは違う。ダンティカ自身の世代よりさらに豊かな次の世代、ダンティカ自身のように苦勞と努力の末にアメリカでまずまずの地位と経済力を手に入れた人びとの子どものたちの世代の若い人びとだ。双子の姉妹ジゼルとイザベルは、両親とハイチに住む祖父母からハイチの歴史と文化を受け継ぎつつ、アメリカの若者文化を生きている。突然の自動車事故でイザベルが死に、ジゼルは生き延びる。イザベルを失ってから17歳の誕生日までの試練の数か月間のジゼルを中心に、さまざまな形の愛と葛藤が描かれる。ジゼルとイザベル姉妹の愛、それぞれの初恋と友情、夫婦の愛とそれぞれの人生、そして双子の祖父母たちの人生。読者は、ハイチ系アメリカ人という登場人物たちの文化的背景に思いを致すことがたとえなかったとしても、私たち人間には一人ひとりにたった一つのかげがえのない命と人生があるという、分かりきった事実を今更のように突きつけられ、その重みと尊さを——臓器移植の問題をまで含めて——あらためて考えさせられることになる。^(注13)

3. 滝沢哲学

私と滝沢哲学との出逢いについては冒頭に述べた。爾来38年、生きることにおいても研究においても、滝沢哲学は常に私の羅針盤であり、その読解の座標は私の遙かな目標である。以下に現時点での私の理解を述べて、その肝要な点を紹介する。

滝沢思想の根幹は、人間とはそもそもどのような存在であるのか、その起源と成り立ちと構造の正確な指摘である。そこから、したがって人は本来、何を支えとし、どのように生きるべきなのかを解き明かし、にも拘らず現実にはどのように思い誤り、実際に支えとなり得ないものを「支え」として、自他をともに不幸にしながらそれに気づきもせずに日常生きていることの多いかを思い知らせてくれる。哲学者西田幾多郎は、1933年『思想』誌に掲載された滝沢（当時24歳）の論文「一般概念と個物」を読み、「私はこれまでこれ位よく私の考をつかんでくれた人がないので大なる喜を感じました はじめて一知己を得た様におもひました」と滝沢に書簡を送った。ドイツに留学した滝沢は（当時25歳）、その西田の勧めで師事した神学者カール・バルトの聖書講義で学んだ「インマヌエル」＝「神われらと共にいます」の事実（関係・真理・ロゴス）こそが、自身が生涯求めてきた、自

分という存在はどこからどのように生まれてきて、今はどこにいて、どこへ行こうとしているのかを指し示していることを、すなわち私たち人間が生ある限り拠って立つべき絶対に確実な人生の基盤——「私たち各自の脚下に厳として実在する基点＝全人類に共通な生命の基盤」（『わが思索と闘争』三一書房 114）——であることを、確信した。そしてこの、バルトを介して出合い確認した、人間主体成立の根柢に宿るロゴス（人間的活動の根源的制約）を、思索をさらに深めるなかでその後発見した・バルトの思惟になお不足している視点を補い、神（真実無限の創造的主体）と人との間の絶対に「不可分・不可同・不可逆」的な関係、と言い表し、その實際を、七十数冊に及ぶ著作のなかで、さまざまな切り口と視点から懇切丁寧に解き明かした。

滝沢が受講したバルトの講義は処女受胎に関するものであった。「主の使いが夢に現れて言った、『ダビデの子ヨセフよ、心配しないでマリアを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである。彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである。』（マタイ1: 20-1）『見よ、おとめがみごもって男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれるであろう。』これは、『神われらと共にいます』という意味である。」（マタイ1: 23）私たちが今いるここは実にこのままで「神の国」なのであり（「地は神の足台である」（マタイ5: 35））、私たち一人ひとりの人間は、神によって命を与えられ、この神の国に、神の道に沿って生きることを許されているし、生きなくてはならない（「あなたがたの言葉は、ただ、しかり、しかり、否、否、であるべきだ。それ以上に出ることは、悪から来るのである。」（マタイ5: 37））。

人は、生物学的には父の精子と母の卵子が結びついて生命を持った人間となり、母の胎内で生まれ、月満ちてこの世に誕生するのであるが——そして普通、一般の人の認識はそこに留まるのであるが——実在的・根源的には、すべてのものの造物主（the Creator）である神によって造られたもの（creature）として命を吹き込まれ、その父なる神と、絶対に切れている混同すべからざる区別において（不可同）、絶対に離れ難く結びついており（不可分）、しかもその先後の順序はその本質上実体的かつ作用的に絶対に逆に出来ない（不可逆）ものとして存在する。そのようにして人は、生まれるや否や、神の絶対無条件の自由を映す完全な自由（主体性）を与えられ（ということはつまり、神の命令にどこまでも自己の責任において従う責務を負い）、隅から隅まで神の無償の愛に満たされた舞台上、それぞれの人生をその終りの時まで「自由に」演じる。

「ナザレのイエスは、……ひとがもしその出処を問うなら、それは言葉も思惟も行動も一切の人の働き、人間的諸関係のただ単純に断たれている処——人そのものの成立の根柢を成す神人の原関係、この原関係の主なる

神自身——から、かれに背いて闇の中に迷い出たすべての人の救いのために送られた『啓示の光』（ルカ2章32節）というほか、どう言いようもないのである。」（『聖書のイエスと現代の人間』177）

「そうだとすれば、福音の記者たちが、史実のイエスの真実相を説き明かして、『聖霊によりて孕まれ、処女マリアより生まれ』と言い、『底なしの闇の引力、罪の牢獄からすべての人を解き放つため、贖うために、罪なくして十字架上に血を流した』と言い、『三日目に（その死がすでに絶対に取戻しがたく定まった後に）よみがえった』と言い、はては『天に昇って太初の日のごとく神とともに在り、終末の日にはかならず来るべき人の子こそが、かれだ』と言ったとして、事柄の本質上何の不思議があろう。福音の記者たちは、かれらがかつて眼の前に見ていたイエスを、その真実の出处・帰趨を視座として把え返した。と同時にかれらは実際に『太初之言（それ自身神である神の子）が肉と成った（聖霊によって孕まれた）』云々と言ひ表すほかない独一無比の関係（形と動き）を見た。のみならず、『全人格の隠れたる核』においてそれ自身『神の子キリスト』であったものとして、イエスは今、かれら各自のもとに生きていることを、はっきりと自覚した。こうしてかれらにとっては、このキリストをひろく世界に宣べ伝えるということこそが、ナザレのイエスの言動・生死について宣べ伝えるということだったし、またその逆でもあった。ナザレのイエスにかかわる四福音書の物語は、けだしたかのようにして創り出されたのだ。まことにそれは、ただそれのみが真に実在する神の空間において事実存在する『神の子キリスト・イエス』自身によってかれらに恵まれた驚嘆すべきファンタジーの所産であった。」（同177-8）

そしてその「驚嘆すべきファンタジー」は現在、私たちによって、「科学的」検証に堪えない単なるファンタジーとして——美しく貴重な示唆に富むお話ではあるが、畢竟、現代の世界に生きる私の生には、ましてキリスト教徒ではない私の生には、何の関わりもない単なる物語として——読まれてはいないだろうか。実際、私たち一般の人々のみでなく高名な聖書学者らまでもが同じ轍を踏んでいることを、滝沢は鋭く指摘している。

私たち人間は、確かな生の土台がなければ、何か自分を支えてくれる支えを持っていなければ、ひと時も安心して生きることはいかならないから、必死でどこかに自分の支えを捜し求める。財産、権力、地位、肩書、学歴、学識、名声、美貌などから、高潔な精神や正義感や清らかな心のようなものまで、ありとあらゆる物心両面の持ち物を手にして、それを支えにそれに依って安心して生きようとする。しかし、人が自分で自分の生そのものの基礎・土台を置くことはできない。人が自ら置いた土台は、たとえどんなに確かなものであっても、それを置いた人の自己そのものを本当に支えることはできないからだ。滝沢が言葉を尽くして指し示している「神人一体（Immanuel）（神われらと共に在す）の事実（関係・真

理・ロゴス）」のみが、「文字どおり絶対に確実な・全人類の生の・共通基盤」なのである。（『ドストエフスキーと現代』124）人間の生は、その歴史も社会も、この唯一の神人の根源的關係（神の子キリスト）の支配——絶対無償のその愛の審き——の下に不断に新しく生起するものとして初めて人間の生である。そして神によって造られ、神と共にある者として、人間がどう生きるべきか——どのように考え、どう振る舞うべきか——は、根源的・本質的にも歴史的・情況的にも、人の欲求や判断や決意に先立って、そのつどすでに神によって決定されている。人はその神の決定に基づいてのみ、実際に生きることを許されるし、生きなくてはならない。そしてそのようにひたすらに努めるかぎり、人生に行き詰るようなことは決してない。そうであるのに——その経緯は聖書にすべて詳らかに記されているのに——私たち人間は、「親の心子知らず」を地で行くかのように、神の光から目をそむけて、暗闇のなかで不安に追い立てられながら、自分の思いを先立て、自らの生の支えを求めて止まない。^(注14)

くり返しになるが、「一般に実存の人にとって、決定的に重大なことは、かれ自身の生と闘いに、『絶対不変の基礎』が、真にそれ自体で実在する確かな支え（自己の支柱とすべき根本的な理由）が在るかどうかに、在るとしてかれが日常それを支えとして立っているかどうかにある」（『ドストエフスキーと現代』23-4）。「人間が他の動物とちがって、意識する存在だということは……自己自身の生の究極的な根拠あるいは目的をどこに置くかを問われている存在、そのつどこの問いに対してある特定の答えを提出している——というよりもむしろみずから特定の形の答えと成っている——存在だということである。……そうしてその働きは、それがまったく反省以前の直接行動であっても、すでに動物とちがってその選択の正邪・精粗を問われかつ審かれることを免れない『目的意識的活動』の一種である。」（同26-7）

人間的主体（＝客体的主体）成立の根柢に宿るインマヌエルのロゴスは、自由な主体として定められてそのお蔭で手にした完全な自由をもって「主体的に」（＝真の根元を忘却して根無し草的に）生きようとする人間の生活・社会のなかに逆限定的にその支配力を貫徹する。私たちが現に体験している（自ら引き起こしている）人間関係や社会の歪みや軋み、不平等や亀裂や対立、ひと言で言って不健全さと生き難さは、私たちが自ら取っている現実の形への神の審きであり、同時に、こんな生き方をしているのはダメだと私たちに痛感させるために神が下した愛のムチだとも言えるのだ。そのインマヌエルの神の愛の戒めの言葉を、私たちが聴き分け、悔い改めて、それだけが真実確かな存在の事実のロゴスに堅く立つことを努めるか否か、それこそが、私たち人間の幸不幸を分ける。しかしながら、その単純なことが、いかに困難であることかは、「狭い門から入れ。滅びに至る門は大きく、その道は広い。そして、そこからはいって行

く者が多い。いのちに至る門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない」(マタイ7章13節)と聖書に言うとおりである。

しかしながら、絶望する必要はない。「いのちに至る門」を見いだしている人は、決して少なくはない。滝沢がその著書で言及しているドストエフスキー、夏目漱石、宮沢賢治等々に限らず、たとえ聖書など読んだことはなく「インマヌエル」という言葉を知らずとも、たとえキリスト教の教えにも仏教の教えにも触れたことがなくとも、同じ思想に行き着き、同じ処を見つめて生きた先達や生きている同時代人が数多くいて、常に私たちに語りかけていてくれる。

「厳密な意味で思想というのは、少し古い言葉で『人生観』・『世界観』、このごろの言葉で『価値観』と呼ばれるものといってよい……それは、全人生の窮極の基礎と目的にかかわるものの見方・感じ方・考え方のことにほかならない。さらに砕いていうと、それぞれの人の生き方の基調、いわば人そのものの立てる響き——むかし北条民雄が『癡者はただ人間の響きだけを聞く』といったその『響き』——のことである」(『人間の「原点」とは何か』178)。そして、「思想上或る一人の人の成す特定の形は、それとしてかならず一つ特定の波動を生じる。他の人はこれに呼応共鳴するか反撥抵抗するか、かれ自身としてまた何か特定の形を成す」(同179)のである。私自身がボールドウィン、ウォーカー、ダンティカの世界に惹かれ、深く共感したのは、彼らの立てる響きに私の魂が共鳴したために他ならない。

私たちが知らなくとも須臾も私たちの元を離れない主なる神は、常に私たちに「あなたはどこにいるのか」と呼びかけておられる(創世記3章9節)。意識的であれ無意識のうちにであれ私が出しているその問いへの答が、私の生命の芯を成す基本感覚、私の視座(frame of reference)の在り方、すなわち「価値観」である。平たく言うと、それは、自分自身と他のすべての物や人にかかわる私自身のかかわり方の基調、自分自身を含め世界のすべての出来事の価値が私にとって測られてくる価値基準、つまりすべてを読み解く私の読解の座標である。そしてひとりの人の「価値観」の波動は、その「響き」を乗せて必ず他の人びとへと伝わっていく。そう、始まりはいつもひとりの人なのだ。大事なのは小さなひとりの人なのだ。願わくば、「インマヌエル」の響きに乗せた波動がひとりからひとりへとどこまでも伝わっていき、「フェイク」と「^{えせ}似而非」が横行する今の世の闇がいかに濃くとも、虚無に振り回されることなく、私たち一人ひとりが、与えられたそれぞれの状況のなかで、淡々としかし全力を尽くして、自分自身と周りの人びとのために、なすべきことを成していきたい。そして、ドストエフスキーが「ゾシマ長老の年若き兄」に言わせた、「お母さん、泣くのはおやめなさい。人生は樂園です。僕たちはみんな樂園にいます。ただ僕たちがそれを知ろうとしただけなんです。もしそれを知る気にさえなつ

たら、明日にもこの地上に樂園が出現するのです」(『ドストエフスキーと現代』175傍点は原著)の言葉をかみしめたい。

4. おわりに

私は、文学研究者としてのみでなく生活者として本を愛し、文学を愛する。若者の本離れ・文学離れが憂慮される現代であるが、文学は汲めども尽きぬ人生の智慧の宝庫である。ダンティカは、私たちが自らを本当に理解して十分に人間として生きるためには文学が、それも良い文学が、必要だ、と述べている。

“We need literature because we wouldn't know ourselves without it. Whether it is oral or written, we need good literature to be fully human.”

またさらに、ノーベル文学賞受賞者トニ・モリスン(Toni Morrison)を引用して、「すべての優れた芸術は政治的なものだ!」とも述べている。

I have always loved this Toni Morrison quote where she says, “All of that art-for-art's sake stuff is BS.……Are you really telling me that Shakespeare and Aeschylus weren't writing about kings? All good art is political!”

そして、I can't agree with these statements more! というのが私の正直な思いである。

最後に、『ドストエフスキーと現代』の末尾に掲載されている、滝沢が全共闘運動に対する大学の対応に抗議する形で九州大学を辞職する前年の一九七〇年に開催された自主ゼミの案内文を、私自身と読者の方々への呼びかけとして、転写紹介させていただき、拙論を締め括りたい。

・自主ゼミのすすめ『何を支えとして生き、かつ闘うか』

表記の問いは、一見すると余りに抽象的・一般的で、差し迫る「情況」とは何の関わりもないように見える。しかし、眼を据えて見るがよい。この一つの問いに対するわれわれ各自、人それぞれの応答こそ、まさに「情況」の深部を構成するもの、世界の隅々にまで広く浸透している情況中の状況ではないか。その応答の最もラディカルな形として、われわれはまずドストエフスキーと対決する。諸君が、もし中途にして逃亡することさえなければ、諸君はやがてかならずや、暗く重たい現情況の只中に、血路を開く可能根拠が、その一切の資格を問わず、各自の脚下に蔵存することを見出すであろう。

時……毎週木曜日夜7～9時

所……九大法文系209号演習室

テキスト……《カラマゾフの兄弟》

参加資格……老若男女・身分・職業・党派その他一切の資格を問わない。

1970年10月26日

注

- (1) シャーデンフロイデ：他者の不幸、悲しみ、苦しみ、失敗を見聞した時に生じる、喜び、嬉しさといった快い感情。ドイツ語で「他人の不幸（失敗）を喜ぶ気持ち」を意味する。
- (2) 比佐子さんのこの本の存在は福岡女学院短期大学の恩師から教えていただいた。お便りをいただき、そのなかに「昨夜は『比佐子その生と死』を明け方まで読みました。読みながら貴方を想いました」とあった。恩師が私を連想してくれる人というのはどんな人だろう？と、すぐに入手して読んだ。読んでみると、私の中に比佐子さんの素晴らしい資質に匹敵するものは何もなくあった。『比佐子その生と死』上下巻（三一書房1980）と『比佐子 生きることと考えること』（三一書房1984）の3冊から学んだことは、計り知れない。
- (3) “It is not too much to say that whoever wishes to become a truly moral human being……must first divorce himself from all the prohibitions, crimes, and hypocrisies of the Christian church.” (*The Fire*, p.46)
- (4) “Love takes off the masks that we fear we cannot live without and know we cannot live within. I use the word “love” here not merely in the personal sense but as a state of being, or a state of grace—not in the infantile American sense of being made happy, but in the tough and universal sense of quest and daring and growth.” (*The Fire*, pp.81-2)
- (5) 松本 昇他編『ハーストン、ウォーカー、モリスン — アフリカ系アメリカ人女性作家をつなぐ点と線』（南雲堂フェニックス、2007）所収
- (6) 出版されるとすぐに、黒人男性批評家たちから、黒人の恥部を曝け出しているとして猛烈なバッシングを受けたが、ピューリッツァー賞を受賞し、スピルバーグによって映画化もされた。これ以前には娯楽映画で評価を得ていたスピルバーグが、この後社会性・政治性の強い「シンドラーのリスト」の制作に取り組んだのは、この映画を監督したことがきっかけとなったと言われている。
- (7) Limited (=Ltd.) は「有限の」つまり「有限会社」。これをUnlimited（無制限の、自由な）とした。
- (8) 『関口功教授退任記念論文集 アメリカ黒人文学とその周辺』（南雲堂フェニックス、1997）所収
- (9) ‘history’ (his story) に対峙させたウォーカーの造語
- (10) オープニングで彼らの公開処刑の場面が紹介されている。彼らは、デュヴァリエ独裁政権を倒すべくゲリラ戦を行うために1964年アメリカからハイチに向かった「ジュヌ・アイティ（若いハイチ）」の13人のなかの2人。逮捕された後、みせしめのために公開処刑された。
- (11) 中間航路（Middle Passage）は、西ヨーロッパとアフリカ西海岸と南北アメリカの三地域を結んで行われた、いわゆる大西洋三角貿易のうち、黒人奴隷が運ばれたアフリカから新大陸までの航路を言う。大西洋黒人奴隷貿易（16世紀～19世紀）の推定数は9,566,100人（カーティンによる）～15,520,000人（オーエンによる）。平均で1,200万人～1,300万人。奴隷貿易中の死亡率は17世紀で15～16％、18世紀で10％（平均値、50％以上ということも稀ではなかった）。100万人超のアフリカ人の遺骨が今も大西洋の海底に眠っている。（浜 忠雄『ハイチの栄光と苦難 — 世界初の黒人共和国の行方 —』（刀水書房 2007）より）

(12) [ハイチ史]

1492年コロンブス到着（新大陸「発見」）

1697年フランス領となる。フランス人はアフリカから100万人の奴隷を「輸入」し、コロンブスが「様々な種類の巨木は天にも届きそうであった」と言った森林は、木々は伐採されて彼らの豪邸のための建材としてヨーロッパへ送られ、サトウキビとコーヒーのプランテーションへと変えられて、徹底的に破壊された。そこで生産された砂糖とコーヒーはフランスを最も豊かな国へと押し上げた。当時世界で消費された砂糖の40％、コーヒーの60％がハイチ産であり、ハイチは「カリブ海の真珠」と称賛された。

（現在のハイチは、貧しい人びとが炭を作って売るために木々の伐採を続けて、その森林残存率は3.5％で、世界最悪であり、ハリケーンや洪水時の被害を大きくしている）

1791年8月14日、ヴードゥーの神官ブクマンが主導した「カイマン森の儀式」で、奴隷たちが一斉蜂起の意思統一を図った。

1804年1月、13年にわたる反乱の闘いの末、強大なフランス軍を破り、「近代史上唯一成功した奴隷革命」によって黒人奴隷解放を実現し、フランスから独立して、「世界史上初の黒人共和国」となる。

しかし、当時まだ奴隷制を布いていたアメリカ（アメリカの奴隷解放宣言は1863年）を含む列強諸国からの差別と経済的搾取を受け続け、しかも、旧宗主国フランスから独立国として承認してもらう見返りとして支払うことになった1億5千万フランという巨額の賠償金にも苦しめられて、独立後のハイチの歴史は、内乱と政変の頻発と経済の永続的な低迷とで、安定することはなかった。

1915年～34年アメリカによる軍事占領

1957年～86年Francois “Papa Doc” Duvalier (1957-71) と19歳でその後を継いだJean-Claude “Baby Doc” Duvalier (-86) の親子二代による独裁政権。

アメリカは、この1957～1986のデュヴァリエ独裁政権による暗黒の恐怖政治の最大の理解者となり経済・軍事援助を惜しまなかった。

デュヴァリエ政権下では、3万人～6万人が殺され、100万人以上が国外へ逃れた。

1986年に「ベビー・ドック」がフランスへ逃げた後、全くの無秩序状態と化したハイチに、IMFは2,460万ドル（約27億7千万円）を貸与した。見返りにハイチ政府は、輸入米や他の農産物への関税引き下げを求められた。

1990年12月アリスティド神父（Jean-Bertrand Aristide）が「ラヴァラス（浄化する激流）」を選挙スローガンに大統領選に立候補、民衆の圧倒的的支持を得て（67％の得票）大勝利を果たした。

1990年（アリスティドの大統領選当選）～2004年（アリスティド辞任）は、アメリカによる「第二次軍事占領」と言うべき期間

＊1990年代にビル・クリントンが推し進めた貿易自由化でハイチ市場は更に押し開けられ、米の関税は50％から3％にまで引き下げられ、政府の助成金に守られたアメリカ米がハイチ市場に雪崩れ込み、ハイチ農民の米作は立ち行かなくなった。その結果、多くの農民は農業を諦め、都市のスラムへと流れ込んだ。

1991年2月アリスティド政権成立。実質的に民主的な選挙

で選ばれた初の大統領。

1991年9月軍事クーデター。アリストイド大統領国外脱出

1993年6月～国連安保理制裁

1994年9月カーター台意により軍指導部は退陣に合意。多国籍軍展開。

1994年10月アリストイド大統領帰国

1995年3月多国籍軍がハイチ・ミッション（UNMIH）に移行

1996年2月プレヴァル大統領就任

1997年11月国連ハイチ・ミッション（UNMIH）がハイチから撤退

2001年2月アリストイド（大統領選圧勝後の）大統領就任（2期目）

＊しかし、アメリカの経済制裁による極度のインフレと物価の上昇、政府内の汚職の問題などで、アリストイド政権に対する国民の不満と国際社会の非難が高まり、反政府運動が勢いを増し、2003年、04年にはアリストイド大統領の辞任を要求する反対派とアリストイド支持者との間の衝突が激化していった。

2004年2月武装勢力活動先鋭。アリストイド大統領国外脱出、暫定政権、多国籍軍

＊改革派大統領アリストイドを嫌った米国は、彼を追放するためフランス・カナダと謀って武力蜂起を仕掛けた（武力蜂起の指導者ギ・フィリップら元軍人集団はCIAと組んでドミニカ共和国国境地帯から武闘を仕掛け、アリストイドを追い詰めた）

2004年6月多国籍軍がハイチ安定化ミッション（MINUSTAH）に移行

2004年10月24日*Brother, I'm Dying* に描かれる国連軍と警察機動隊がシメール（アリストイド支持派）の若者たちに機関銃の集中射撃を浴びせる事件が発生、巻き込まれたダンティカの伯父さんの国外脱出とマイアミでのクローム拘置所への拘留と死亡につながる。

2010年～は「第三次軍事占領」というべき状況

2010年1月12日大地震発生（マグニチュード7）

＊ハイチ政府は最終的に死者数を316,000人と発表

震災後に寄せられた国際的な援助金は60億ドル以上。だが、政府に直接渡ったのは9.1%のみ。ハイチのNGOや企業に渡ったのは0.6%以下。The U.S.-based Center for Economic and Policy Researchの調べでは、アメリカが出した援助金のほとんどはアメリカ企業や団体に渡り、ワシントンD.C. 地区に半分以上が入った。

2011年5月（不正選挙で米政府に後押しされたといわれる）マルテリーが大統領に就任

2015年10月マルテリー大統領の後任を決める大統領選挙

＊マルテリー大統領の政権党「テトゥ・カレ・アイチ党」から出馬したジョヴネル・モイーズ候補が1位（32.76%）、野党のジュディ・セレストン（25.99%）との決選投票が12月に実施されることに決まったが、初回の選挙におけるモイーズ陣営による大規模な不正が発覚して不正糾弾の世論が高まり、選挙は不成立となって、やり直し選挙が同年10月9日に実施されることが決まった。ところが直前にハリケーン「マシュー」が襲来、選挙は再び延期され、11月20日に実施された。この選挙の結果について選挙裁判所は「今選挙に不正はあったが、野党勢力が主張するほど大規模ではなかった」として、選挙を有効と判断。これを受けてハイチの選管にあたる暫定選挙理

事会は、得票率で過半数を上回ったモイーズ候補を当選者と認定した。

2017年2月7日モイーズ大統領就任

＊2015年10月の選挙から1年以上を経てようやく新政権の発足にこぎつけたわけだが、投票率はわずか21パーセントで、モイーズの得票はその半分強であり、有権者全体の1割程度の支持で政権に就くこととなる。

- (13) 翻訳の出版後程なくして、ある友人から、日本女子大学の図書館入口の掲示板に学生の購入リクエストとしてこの本の写真が飾ってある写真が送られてきた。本書は本国ではヤングアダルト本として出版されたもの故、若い読者を得たことは嬉しいニュースだった。
- (14) 私たちの誰もがいかにこの性向に染みているか、その「人としての立ち方の歪み」がもたらす禍を、宮沢賢治は、亡くなる10日ほど前に書いた教え子にあてた手紙にしたためている。「私のかういふ惨めな失敗はたまたもう今日の時代一般の巨きな病、『慢』といふものの支流に過って身を加へたことに起因します。僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふものが何かじぶんのからだに付いたものででもあるかと思ひ、じぶんの仕事を卑しめ、同輩を嘲けり、いまにどこからかじぶんを所謂社会の高みへ引き上げに来るものがあるように思ひ、空想のみ生活して却って完全な現在の生活をば味ふこともせず、幾年かが空しく過ぎて漸くじぶんの築いていた蜃気楼の消えるのを見ては、たまたもう人を怒り世間を憤り従って師友を失ひ憂悶病を得るといったやうな順序です。」（『聖書を読む マタイ福音書講解3』31）

参考文献

- 1) Baldwin, James. *Another Country* (Penguin Books, 1962)
- 2) *The Fire Next Time* (Penguin Books, 1963)
- 3) Walker, Alice. *The Third Life of Grange Copeland* (The Women's Press, 1970)
- 4) Meridian (Harcourt Brace Jovanovich, 1976)
- 5) *The Color Purple* (Harcourt Brace Jovanovich, 1982)
- 6) *Possessing the Secret of Joy* (Harcourt Brace Jovanovich, 1992)
- 7) Danticat, Edwidge. *Breathe, Eyes, Memory* (Vintage Books, 1994)
- 8) *The Farming of Bones* (Penguin Books, 1998)
- 9) 佐川愛子訳『骨狩りのとき』（作品社, 2011）
- 10) *Brother, I'm Dying* (Alfred A. Knopf, 2007)
- 11) 佐川愛子訳『愛するものたちへ、別れのとき』（作品社, 2010）
- 12) *Create Dangerously* (Princeton University Press, 2010)
- 13) 佐川愛子訳『地震以前の私たち、地震後の私たち』（作品社, 2013）
- 14) *Claire of the Sea Light* (Alfred A. Knopf, 2013)
- 15) 佐川愛子訳『海の光のクレア』（作品社, 2015）
- 16) *UNTWINE* (Scholastic Press, 2015)
- 17) 佐川愛子訳『ほどける』（作品社, 2017）
- 18) 佐川愛子『『悦びの秘密を手にして』——女性性器切除の因習に挑む』『関口功教授退任記念論文集 アメリカ黒人文学とその周辺』（南雲堂フェニックス, 1997）
- 19) 『記憶・証言・癒し——『骨狩りの時』における癒しのメカニズム』風呂本惇子編『カリブの風 英語文学とその周辺』2004）
- 20) アリス・ウォーカー セクシズムのくび木を外すために」

- 松本昇, 他編『ハーストン, ウォーカー, モリスン — アフリカ系アメリカ人女性作家をつなぐ点と線』(南雲堂フェニックス, 2007)
- 21) 滝沢克己『佛教とキリスト教』(法蔵館, 1964)
- 22) 『聖書のイエスと現代の思惟 — 八木誠一『新約聖書の成立』を機縁とする一連の省察』(新教出版社, 1965)
- 23) 『芥川龍之介の思想』(新教出版社, 1967)
- 24) 『夏目漱石の思想』(新教出版社, 1968)
- 25) 『自由の原点・インマヌエル』(新教出版社, 1969)
- 26) 『現代のこととしての宗教』(法蔵館, 1969)
- 27) 『人間の「原点」とは何か』(三一書房, 1970)
- 28) 『ドストエフスキーと現代』(三一書房, 1972)
- 29) 『私の大学闘争』(三一書房, 1972)
- 30) 『瀧澤克己著作集1 西田哲学の根本問題』(法蔵館, 1972)
- 31) 『瀧澤克己著作集2 カール・バルト研究』(法蔵館, 1975)
- 32) 『瀧澤克己著作集3 夏目漱石1』(法蔵館, 1974)
- 33) 『瀧澤克己著作集4 夏目漱石2・芥川龍之介』(法蔵館, 1973)
- 34) 『瀧澤克己著作集5 現代哲学の課題』(法蔵館, 1973)
- 35) 『瀧澤克己著作集6 近代主義の超克』(法蔵館, 1974)
- 36) 『瀧澤克己著作集7 仏教とキリスト教の根本問題』(法蔵館, 1973)
- 37) 『瀧澤克己著作集8 哲学・倫理学入門』(法蔵館, 1974)
- 38) 『瀧澤克己著作集9 経済学・哲学論集』(法蔵館, 1974)
- 39) 『瀧澤克己著作集10 遊戯・芸術・宗教』(法蔵館, 1974)
- 40) 『「歎異抄」と現代』(三一書房, 1974)
- 41) 『わが思索と闘争』(三一書房, 1975)
- 42) 『宗教を問う』(三一書房, 1976)
- 43) 八木誠一編著『神はどこで見出されるか』(三一書房, 1977)
- 44) 『自由の現在』(三一書房, 1979)
- 45) 『続 佛教とキリスト教』(法蔵館, 1979)
- 46) 『デカルトとサルトル』(創言社, 1980)
- 47) 『聖書のイエスと現代の人間』(三一書房, 1981)
- 48) 講座『日本人の精神構造』(1981)
- 49) 『バルトとマルクス 新しき世界』(三一書房, 1981)
- 50) 『哲学は何のためにあるか』(法蔵館, 1981)
- 51) 『日本人の精神構造 西田哲学の示唆するもの』(三一書房, 1882)
- 52) 『あなたはどこにいるのか』(三一書房, 1983)
- 53) 『将棋の哲学』(創言社, 1983)
- 54) 編『比佐子 その生と死 (上)』(三一書房, 1980)
- 55) 編『比佐子 その生と死 (下)』(三一書房, 1980)
- 56) 編『比佐子 生きることと考えること』(三一書房, 1984)
- 57) 『現代における人間の問題』(三一書房, 1984)
- 58) 『神のことば人の言葉 — 宗教・歴史・国家』(創言社, 1985)
- 59) 『読解の座標』(創言社, 1987)
- 60) 『純粹神人学序説』(創言社, 1988)
- 61) 「何を, いかに, 私はカール・バルトのもとで学んだか」坂口 博編『滝沢克己著作年譜』(創言社, 1989)
- 62) 『滝沢克己講演集』(創言社, 1990)
- 63) 『現代の医療と宗教 身心論をめぐる』(創言社, 1991)
- 64) 『朝のことば 学ぶこと・考えること』(創言社, 1992)
- 65) 『聖書を読む マタイ福音書講解1』(創言社, 1993)
- 66) 『聖書を読む マタイ福音書講解2』(創言社, 1994)
- 67) 『聖書を読む マタイ福音書講解3』(創言社, 1994)
- 68) 『聖書を読む マタイ福音書講解4』(創言社, 1995)
- 69) 『聖書を読む マタイ福音書講解5』(創言社, 1996)
- 70) 『聖書を読む マタイ福音書講解6』(創言社, 1998)
- 71) 寺園喜基訳『カール・バルト＝滝沢克己往復書簡1934-1968』(新教出版社, 2014)
- 72) 滝谷美佐保編『滝沢克己・最晩年に語ったこと — 人は何を支えにして生きるか』(中川書店, 2017)
- 73) 前田保『滝沢克己 哲学者の生涯』(創言社, 1999)